

二〇二四年十二月三十日

「一年はあっという間に終わるな」

朝食の時に、父と母が話していた。シンジヨ
ーもその通りだと思う。四月から始まった新
しいクラスでの令和六年度も、あと三学期だ
けになってしまった。
シンジヨーは、冬休みの宿題をほぼ終わり
にしていた。書き初めも仕上げた。担任から
出された宿題も終えた。残るは二つだった。
一つは手伝いである。毎日二つはやるこ

と「が学年から出された宿題であった。シン
ジヨーは毎日、皿洗いと洗濯物たたみをし続
けていた。そして今日は大掃除。いろんな所
をきれいにしよう、朝から父に言われてい
た。
そしてもう一つ残っているのが、校長先生
から出された宿題だ。終業式、校長の言
葉の中で、こんな話があった。
「校長先生から、扇小の皆さんに一つ宿題を
出します。一月になったら聞きますので、
必ず考えておいて下さい。何を考えたら
いたいかというところ、どんな大人になるか、

んな笑顔でとつてもかわい子たちばかりで	任として、入学式で子供たちに出会った。み	今日は始業式だった。私は、一年組の担	二〇五一年四月十日	。	ので、改めて読んでみた。	の姿を書いた。その下書きがまだ残っていた	てしまったので、三十九歳でももちろん教員	二十九歳で小学校教員をしていたのだ。	た。それが終業式前ギリギリだったのだ。	一度、三十九歳の自分の姿を書いて、提出し	ちおう実行委員が受け取ってくれたが、もう	任がそれに気づいてくれた。その作文は、い	分の姿を書いて、一度提出してしまった。担	ている。しかし、勘違いして、二十九歳の自	二〇五一年、シンジヨーは三十九歳になっ	委員に提出をしたが、下書きがとつてあった。	出しから、二〇五一年の作文を探した。実行	自分」に書いていた。シンジヨーは机の引き	そうだ、クラスで作っている文集、「未来の	ても、と考えて、シンジヨーはハツとした。	「どんな大人になっってるか」と言われ	配もしてしまった。	分かるのだらうかと、シンジヨーは余計な心
---------------------	----------------------	--------------------	-----------	---	--------------	----------------------	----------------------	--------------------	---------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	---------------------	-----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	--------------------	-----------	----------------------

